

4 技能統合型学習活動へと発展させる指導の工夫

～原稿なしで Show&Tell を楽しむ生徒を育成するには～

研究の経過と概要

- 1 報告書ができるまで
- 2 第61次教育研究静岡県集会で論じられた問題と今後の課題
- 3 報告書作成協力委員

本文

- 1 はじめに
- 2 実践内容
 - (1) 発信型コミュニケーション活動に関する生徒の実態
 - (2) 課題を克服するための具体的な手だて
 - ① 聴き手を「お客さん」にしない Good Listener の育成
 - ② 聴き手を巻きこんだ発表ができる Good Speaker の育成
 - ③ スキルを育成するための常設活動
 - ④ 教科書で学習した内容を必要に応じていつでも取り出せるようにするための活動
 - ⑤ 活動を単発で終わらせないための工夫
- 3 まとめ
 - (1) スキルを高めるための活動を行って
 - (2) 教科書指導について
 - (3) 今後の課題

静岡県教職員組合

柳瀬 昭夫 (やなせあきお)

掛川市立栄川中学校

1 報告書のできるまで

言語は文化である。そのため、外国語の学習をととして自己と他者を尊ぶ姿勢を育て、国際理解の土台を培いたい。そして、4技能を関連させながら、英語のコミュニケーション能力と積極的に自己実現する態度を育てたい。それには、基礎・基本の定着から出発して、適切な中間ステップの活動を工夫し、小学校・中学校の接続を見通した最終目標につなげる指導をめざすことが必須であると考えられる。そこで以下のことを大きな視点として研究をすすめてきた。

- (1) コミュニケーションへの意欲を高める授業のあり方
- (2) 小中接続をスムーズに行うための授業のあり方

2 第61次教育研究静岡県集会で論じられた内容と今後の課題

各地区の実践報告は、主に、上記視点(1)(2)について、方向性がはっきりした報告であった。その中で①4技能(読む、聞く、話す、書く)統合型学習活動へ発展させる指導の工夫やコミュニケーションへの意欲の向上を図る単元構成の工夫②コミュニケーション活動に意欲的な生徒を継続して育てるために、小中の連携を意識した接続期の指導をどうすすめていくかという2つの柱の下での研究発表が行われた。

①についての発表では、単元構想や個別支援のあり方、学び合い学習、視聴覚機器を使った授業の展開、Show & Tellを楽しむ生徒の育成、生きた題材(生徒が興味をもつ内容)を使った授業、伝えあう喜びを味わわせる工夫など、コミュニケーションへの意欲を高める授業のあり方について熱心な討議がなされた。

②についての発表では、学級担任がつくるよりよい外国語活動の工夫、小学校外国語活動と中学校の教科書との関連の確認、小中共通表現や場面をピックアップし共通の教材教具を使用している活動、小学生に中学校で使用されている教科書等の紹介、小学校外国語活動の主な教材を学区ごとに確認するなど、小学校での外国語活動の実践の様子と中学校での対応について何が求められているかが論じられた。

今後の課題として考えられるのは、コミュニケーションへの意欲を高める授業を、継続的に行っていくことであろう。4技能のバランスを意識した学習活動や子どもたちの思いを伝え合う表現活動を授業に取り入れ、それを繰り返したりまたフィードバックをしたりしながら授業を組み立てていく必要があると思われる。次に、小学校同士また小学校中学校間で情報の共有を定期的に行っていくことが大切になってくる。各小学校で学習している内容が共通の内容であれば、それを土台として中学校の英語授業をスタートすることができる。また小学校の外国語活動が中学校の英語授業の前倒しにならないように、外国語活動の目標を明確にして授業をすすめる必要もある。そして小学校の教員が安心して外国語活動にとりくめるためには、教材研究や教具の共有など環境整備が急務である。校種ごとの目標は違っても、子どもたちのために小中の接続がスムーズに行われるように今後一層配慮していかなければならないだろう。

3 報告書作成協力委員

工藤 優(静岡・川原小) 竹下雅美(三島・徳倉小) 和久田伸介(浜松・東部中)
野崎正美(沼津・愛鷹中) 鈴木高広(榛原・吉田中) 矢野 淳(静岡大学)

1 はじめに

2008年3月、中学校学習指導要領が告示され、同年7月には同解説が出された。解説では、中学校外国語科の改訂にあたり、以下の4つの基本方針を挙げている。

○自らの考えなどを相手に伝えるための「発信力」やコミュニケーションの中で基本的な語彙や文構造を活用する力、内容的にまとまりのある一貫した文章を書く力などの育成を重視する観点から、(中略) **4技能を総合的に育成する指導を充実する。**

○指導に用いられる教材の題材や内容については、(中略) **4技能を総合的に育成するための活動に資するものとなるよう改善を図る。**

○「聞くこと」、「話すこと」、「読むこと」及び「書くこと」の**4技能の総合的な指導を通してこれらの4技能を統合的に活用できるコミュニケーション能力を育成する** (後略)

○(前略)「聞くこと」、「話すこと」、「読むこと」及び「書くこと」の**4つの領域をバランスよく指導し、**高等学校やその後の生涯にわたる外国語学習の基礎を培う。

このように、「聞くこと」、「話すこと」、「読むこと」及び「書くこと」の4技能を総合的に育成することの必要性が強調されている。また、目標においても以下のように、最後に4技能についての記述がなされ、最重要事項であることを強調している。

外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、**聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う。**

本校英語科では2009年度より、スピーチやディスカッション、プレゼンテーションなど4技能の総合的な活用を前提とした活動を単元のまとめとなる統合的学習活動として取り入れてきた。これらの活動は、新学習指導要領で新たにうたわれた重要課題に沿ったものであり、これからの中学校英語の指導の方向性にマッチしていると考ええる。

しかし一方で、「ある文法や構文を学習した直後のドリルではほぼ満足できるレベルにあると思われるが、テーマや場面を与えられると、どのような文法や構文を使ったらよいのか混乱が生じるようである」(『すぐれた英語授業実践』p.140: 大阪府立東寝屋川高等学校・鶴岡重雄)といった指摘がある。現行の教科書シラバスは細分化されており、各単元で様々な言語活動が行えるように工夫されているが、それだけでは発信型のコミュニケーション活動を実践するには不十分ではないかと考える。生徒が4技能を総合的に活用して活動に取り組めるようにするには、もっと生徒の実態から具体的な手だてをうつことが必要と考える。

2 実践内容

(1) 発信型コミュニケーション活動に関する生徒の(よくある)実態

- 【課題①】 聴き手がお客さんとなっていることが多く、Q & Aをするなどのインタラクティブな活動になっていない。
- 【課題②】 生徒はあらかじめ原稿を作成し、それを発表（音読）するだけになっていることが多い。しかも聴き手はお客さん化しているため、一方的な発信になりやすく、聴き手にとって内容がどうであるか、わかりやすい英文であるか、等の視点に欠ける発表が多い。
- 【課題③】 仮に聴き手から質問をされても、やりとり慣れていないため、発表者がうまく応答できないことが多い。
- 【課題④】 活動の事後の振り返り等で、自分のうまく言えなかったことなど表現や文法に関して、できなかったことにばかり目が向きがちである。
- 【課題⑤】 ふり返りの中で態度などに関する課題を発見し、「次は〇〇のようにやりたい」と考えることはできても、期間があくのでまた同じ失敗を繰り返してしまうことが多い。そのため、いつも「自分の番を終わらせる」ことが目的となっていて、高い達成感を感じる生徒が少ない。

これらはすべて、かつて自分が発信型コミュニケーション活動を実践したときに感じたことである。原稿作成時には、「先生、これどうやって言えばいいの？」にすべて答え、あやふやでわかりにくい原稿にすべて目を通し、活動の準備のためにある程度の時間を費やし、できるだけスムーズに発表ができるように配慮する。そうして活動を行ったにもかかわらず、「本当にこれらの活動は生徒にとって有益だったのか？」「この活動を通して、生徒の何が育ったのか？」がはっきりしないままであった。そこで、上記のように現在生徒たちの中に見られる課題をすべて挙げ、次項に挙げるような具体的な手だてを打つこととした。

(2) 課題を克服するための具体的な手だて

①聴き手を「お客さん」にしないGood Listenerの育成

Show&Tell は周知の通り、自分が体験したこと、見たことを絵に描いたり物を見せたりして、それをみんなの前で発表するものである。この活動の良さは、自分の言葉で表現し、感情を込めて話をするすることで、自然に楽しいやりとりが始まり、プレゼンの楽しみ方を肌で覚える練習ができ、自己表現が豊かになっていくということではないだろうか。つまり、「やりとり」は必要不可欠なのである。

しかし我々日本人は、誰かが話をしているときは、「黙って最後まで目を見て話を聞く」ように指導されてきている。そこでまずは、Good Listener として目指す姿を明確にした。

そして、生徒の実態から必要な手だてを考え、授業はじめの数分をスキルアップのための時間とした。

○ Good Listener としての Communication 行動目標

Level 1:目を向ける…Look (発表者を見て聞く)
Level 2:イエス・ノー…Yes / No (発表者の問いかけに, Yes/No で答える) 反応する…Respond (発表者の発話に対してあいづちをうつ)
Level 3:表す…Express (分からないとき, I don't understand.と言う) 述べる…Remark (発表者の話に対して, 簡単な感想を述べる)
Level 4:尋ねる…Ask (分からない部分を発表者に聞き返す) コントロールする…Control (発表者の声の大きさやわかりやすさについて, Could you speak up?などを使って指示する)
Level 5:止める…Interrupt (話が理解できない時に, 説明を中断させて説明を求める) 関わる…Interact (発表者の問いかけに対して積極的に応答を返す) 盛り上げる…Activate (話題に関して, 発表者に関連質問をして話を活発にする)

②聴き手を巻きこんだ発表ができるGood Speakerの育成

話し手そのものが楽しいと感じられる内容でなければ, 聴き手を巻きこむような発表にはなりにくい。つまり, Show&Tell のテーマを何に設定するか, が非常に重要であると考え。例えば1年生の自己紹介では「なりきり自己紹介をしよう」, 2年生の行きたい場所紹介では「行ってみたい! My Dream Island」, 3年生の思い出紹介では「今だから言える思い出紹介!」など, 生徒が楽しみながら creative に表現できるよう工夫した。

また, Speaker としての Communication 行動目標も次のように設定した。

○ Good Speaker としての Communication 行動目標

Level 1:語る…Talk (原稿ではなく, 聴衆を見て話す)
Level 2:見せる…Show (聴き手が知らない言葉は絵やジェスチャーなどを用いて伝える) 確かめる…Check (OK?など, 聴き手に理解できたか確かめながら話す)
Level 3:説明する…Explain (Do you understand?など, 聴き手の理解をチェックし, Yes の返事がなければさらに丁寧に説明する。説明で困った時は, 教師に言い換えの援助を求める) 聞かせる…Deliver (すべての部分を普通に話すのではなく, 重要な部分をゆっくり大きく話し, 必要なら繰り返し聞かせる)
Level 4:関わる…Interact (一方的に話すのではなく聴き手とやりとりしながら話をすすめる) 尋ねる…Ask (聴き手に問いかけ返事を求める)
Level 5:言い換える…Paraphrase (聴き手が知らない言葉は, 英語で簡単な語に言い換えて伝える)

③スキルを育成するための常設活動

ア J-E Card

No.	Japanese	English	①	②	③	④	⑤
1	全くその通りです。	You are quite right.	○	○	○	○	○
2	説明して下さい。	Please explain it to me.	○	○	○	○	○
3	なぜなのかって。	Please tell me why.	○	○	○	○	○
4	どうしてそうなったの？	Why did it happen?	○	○	○	○	○
5	どう思う？	What do you think?	○	○	○	○	○
6	あなたの意見は？	What's your opinion?	○	○	○	○	○
7	これはどう？	How about this?	○	○	○	○	○
8	はっきり分かった？	Is that clear?	○	○	○	○	○
9	分かった？	Do you understand?	○	○	○	○	○

J-E Card は、対話場面で活用させたい表現をペアで練習するものである。日常生活に近い場面を想定してコミュニケーション活動を行うとき、文法の習得や語彙、表現の暗記だけでは対話は成立しにくく、特に1年生ではコミュニケーション方略

についての指導が大切である。分からないことについて不理解を表明

したり、聞き返すなどができるよう、これらの表現を練習した。それまで、相手の言うことが分からないと、分からない自分が悪いのだ、と対話の継続をあきらめてしまう生徒が多かったが、これにより少しでも相手の意図をくみ取ろうとする姿勢が育ってきた。また、対話活動そのもので必要となる表現も練習に取り入れることも有効であった。

「説明してください。」



Please explain it to me.

イ Active Listening

あらかじめ用意された表現を対話中に使用したり、簡単な感想を述べたりすることはできても、内容に関する質問をすることはなかなか難しいことである。Active Listening は、対話活動でより相互理解を深められるよう、follow-up question をできるだけたくさん行う練習である。そこで、教師が事前に用意した小話を聞いて、できるだけたくさんの質問をする活動を行った。活動後は、どんな質問ができそうか話し合う場面も設定した。

ウ Q→A→A→Q

他者を巻きこみ、対話を継続させていくための練習がペアでの Q → A → A → Q である。教師があらかじめ用意した question で対話をスタートさせ(Q)，もう一方の生徒が質問に答える(A)。ここで終わらないように一文付け加えさせ(A)，最後に相手に質問をする(Q)。こうして、最初の(Q)に対して(A) (A) (Q)まで発話すれば、対話は切れることなく継続していく。1年生から like や have などの動詞を使って3分間対話を継続させることができた。

～1年生で初めて取り組ませた時の実践例～

・最初のQは毎回教師が与えます。例えば、"Do you like natto?"でスターとしなさい、と指示しました。すると、子ども達は次のように対話をすすめることができました。

- Q S1: Do you like natto?
- A S2: No, I don't.
- A S2: But I like tofu.
- Q S2: Do you like tofu?
- A S1: Yes, I do.
- A S1: I eat tofu every day!
- Q S1: Do you like yu-dofu, too?

・上級生になるにつれて、QではWh-Question をたくさん使うように指導している。

Qおはじきを利用して、対話に集中したままカウント！

Q→A→A→Qでは、3分間で何回発話できたか、回数にこだわって取り組ませており、対話が終わった後、回数を記録させている。しかし、「正」の字を書いたり、指を折ったりして回数を数えていると、対話に集中できなかつたり、回数を正確に数えることができなかったりするので、ペアにおはじきが入ったケースを1つずつ配り、1文発話するごとにおはじきを1つ取っていくようにさせている。こうすることで、対話活動に集中することができ、かつ、正確に回数を把握することができる。



Ⅱ Description

教師が示した英語について、既習の語彙や文を駆使して英語で説明し合うペア活動である。対話の途中で言いたいことが言えなくなってしまった場面を想定した言い換えの練習と、お互いの理解を確かめ合いながら **interactive** に対話するための練習である。この活動は、ジェスチャーなしで英語のみを駆使することとした。

～ Description (ペア活動) のすすめ方～

<p>【Sheet A】</p> <p>Goal: 相手から「ピンセット」をもらいなさい。ただし、「ピンセット」は英語では、"tweezer"「トワイザー」と言います。「ピンセット」という語を絶対に使わずにどうにかしましょう。</p> <p>*わたしに～をください = Give me your ～.</p> <p>*日本語の使用はいかなることがあっても禁止！</p>
<p>【Sheet B】</p> <p>Goal: 相手があるものを欲しがっています。何を欲しいのかしっかり聞き出して、正しいカードを渡しなさい。対話中、あなたのカードを相手に見せることはできません。(渡すチャンスは1度だけです)</p> <p>トワイザー = ピンセット</p> <p>分かった語句 tweezer = ピンセット</p> <p>*日本語の使用はいかなることがあっても禁止！</p>

(写真)	(写真)
ピンセット	コンパス
(写真)	(写真)
ホッチキス	トンダ

生徒 A の方は、【Sheet A】にあるように、"tweezer"を相手からもらうために、それが何であるのかを伝えなければならない。生徒 B の方は、【Sheet B】にあるように、相手の欲しがっているものを理解しなければならない。しかし、ジェスチャーで表してもよく分からないものが用意されている上に、言葉だけで正確に物事を説明し、理解してもらうのは、中学生にとって負担が大きすぎる。

そこで、生徒 B には【Sheet B】と同時に、左にある4つの写真も配った。これにより、相手が欲しがっているものがこれら4つのうちの1つであると絞り込むことができる。また、生徒 B の方からも、有益な情報を引き出す質問をすることができた。生徒 B は、最後に「絶対これだ！」と自信が持てたところで一枚だけカードを渡すことができる。一度しか渡すチャンスがないことで、相手の

言いたいことを確実に理解しようと努力する姿が見られた。

④教科書で学習した内容を必要に応じていつでも取り出せるようにするための活動

ア Reproductionまでもっていく教科書指導

【閉本したまま】

- ①PC+KeywordsでOral Introduction
…概要把握を目的として、簡単に行う。
- ②内容に関する日本語でのQ&A …内容に関するQ&A。
- ③Flash Cardで新出語(句)の確認
…概要から意味を予測させることもできる。
- ④一文ずつ本文のRepeat
…文法事項のポイントなどもここで押さえる。

【開本】…音読

- ①Chorus Reading …大きな声でリズムを意識して読ませる。
- ②Individual Reading …リズムよく、なめらかに読ませる。
- ③Read and Look-up …意味のまとまりを考えて読ませる。
- ④Response Reading …教師やCDに続いて読ませる。
- ⑤Reproduction …ピクチャーカードを見て、教科書本文のストーリーを再生する。

【ワークシート】

- ①Summaryを見て空欄を埋める
- ②T or F, Q&Aを行う
- ③本文Writingを行う

教科書は生言語データが豊富に詰まっている。せっかく普段の授業で扱っているのだから、これをしっかり生徒の頭の中に残し、その英文やルールなどマクロストラクチャーをほとんど無意識に取り出して使用できるようになることをめざしたい。そこで本校では、**reproduction** までもっていく教科書指導を行っている。これにより、コミュニケーション活動を支えるための基礎・基本を強化することを狙っている。

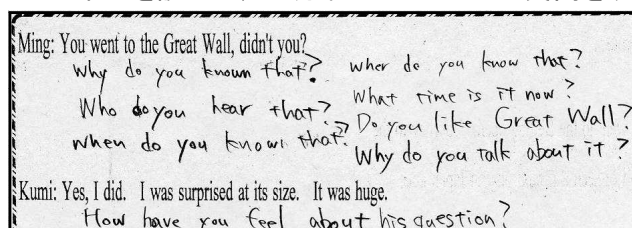
このように、音→文字→語句→文という言語習得の過程を大切にし、理解しやすくすることを目指した。



また、セクションごとのワークシートには、必ず黒板に貼った絵と同じものを用意した。これにより、家庭での自主学習時に絵を見て文を再生する練習ができるようにした。さらに、単元が終わったところで授業で用いたピクチャーカードを廊下に掲示し、いつでも復習ができるようにしておいた。教科書学習は、一度終わってしまった単元には二度と戻らないのが普通であるが、これによって、内容理解後も語彙や文構造に目を向ける機会を増やすことができた。



イ 本文を読んで、不明確なことについて質問をするactive reading

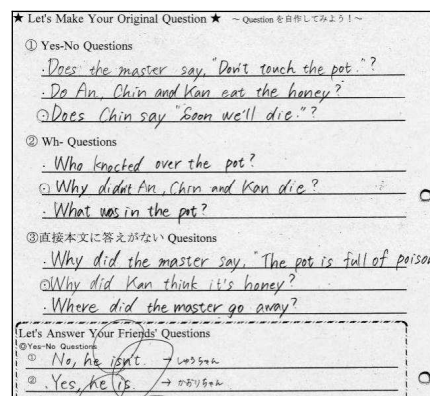


少しでも生徒の頭の中に本文を記憶させておくためには、繰り返し本文に触れさせることが重要だと考えた。そこで、生徒が意欲的かつ自然に、本文に繰り返し触れる活動を考え、以下の実践をしてきた。教科書本文は、生徒が効率よく学習できるように作られており、文の量にも配慮されているため、

内容が曖昧なことが多くある。そこで、本文の内容理解を図った上で、不明確なことや知りたいことについて質問させる活動を行った。これにより場面をよく考え、不自然なところやはっきりしないところを読み取ろうとすることができた。下に示した課では、「なぜ Ming は、Kumi が万里の長城に行ったことを知っているのか？」や、「いつの間にこんな写真を用意したのか？」「Ming は Kumi のことが好きなのか？」などの疑問が挙げられ、全体で考えた質問を出し合う中で、楽しく活動することができた。

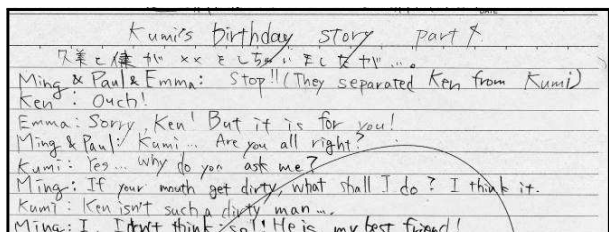
ウ 本文に関する質問を生徒が作成するmake questions

本文を読んだ後、① Yes-No question, ② Wh-question ③ 本文に答えがない question の3種類の質問を生徒自身に作らせる活動を行った。作った後は、小集団(4人組)で互いに質問を出し合った。③を作らせたことで、"Why did the master say, "The pot is full of poison."?のような、"between the lines" question や"beyond the lines" question を作ることもできた。疑問文の作り方がよくわからない生徒は、教員や友だちからアドバイスを受けながらすすめた。質問に答えるためにも、互いに文法チェックを自然に行うようになった。

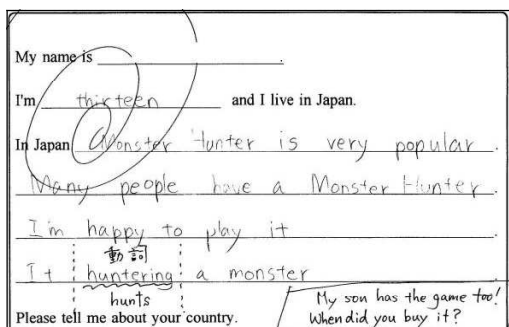


エ 本文の内容の続きを考え、original storyを作成する活動

本文の内容理解が一通り終わったところで、登場人物が2人で歩いている絵を提示し、"They had a date. By the way, what do you usually talk on a date?"と質問し、本文の不自然さに気づかせた。よく考えると、せっかくのデートだというのに会話を楽しんでいる様子は見られず、動物愛護の話に真剣になっているのである。これに気づかせた後、本文の前の部分「デートに誘う場面」、「デート中の会話」、「デートの後の場面」のいずれかについて考えさせ、original storyを作成する活動を行った。生徒たちは、教科書の他の登場人物も登場させながら、ユーモラスな文章を作成することができた。作成した後は、相互に読み合って投票を行い、5 Best Stories を決定した。生徒の中には、単元終了後の自主学習として、さらに続きのストーリーを作成する生徒もできた。



オ テーマに沿ったstoryを作成する活動

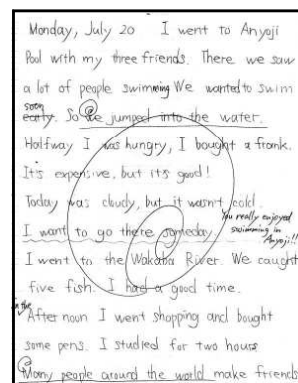


せっかく教科書本文を intake するところまで学習しても、学んだことを output する機会がなければ、生徒は教科書を学習する有用性を見いだせない。自分の言いたいことや伝えたいことを表現する時に、教科書で学んだ表現を自然に用いることができれば、次の教科書学習を行う時のモチベーションを向上させることになると思う。

上図は、日本ではやっていることについて紹介のメールを書く活動で、生徒が書いた文章である。はやっている内容としては、「せっかくだから、自分の好きなテーマで書いてみよう」と指示し、芸能、スポーツ、ニュースなどのジャンルを提示し、辞書のみを使って個人作業で英文を作成させた。提出された物には、必ず内容に関するコメントを書いて返却するようにした。また、辞書で調べた単語については、words list に記入させるようにし、自分が興味を持っている内容について表現したい時には、いつでも振り返って参考にするようにしておいた。

カ 自学ノートでの英作文・日記の奨励

毎日の自学ノートでは、学習内容として①単語や句動詞、慣用表現の徹底練習、②教科書本文のリプロダクション練習、③英語ワークの練習、をあげているが、チャレンジしたい生徒には、英文日記を書かせるようにしている。右は、ある生徒が書いた英文日記である。この日記を書いた時点で、教科書学習は Unit 3 をちょうど終えたところであるが、いくつかの文章で、教科書で過去に学んだ文章を上手く用いて表現していることがわかる。4行目で用いられている、"So we



jumped into the water."は、Unit 1 で学んだ、"Rio jumped into the water, too." (p.6. 1.4~5) をうまく利用している。このように、自分の言いたいことにうまく教科書の文章を用いることができたものは、授業の中で紹介し、教科書を身近な手本として感じさせるようにしている。

キ 教科書学習のrecyclingとなるReading Show

Reading Show	
①開催日	9月1日(土)開校時
②内容	教科書の場内で、教科書の自分の好きな箇所を短時間自由に読み読みする。
③発表者	先生が指定した人
④読む箇所	教科書 p.27~p.28
⑤評価の観点	<p>①「読む時間」で読んでいくか。</p> <p>②「発表」時、自分の好きな箇所が読み、リズムやイントネーションが聞き手にも伝わるか。</p> <p>③「内容」を聞き手にも伝わるように読んでいくか。</p> <p>※当日は指定された箇所を、活動後記録する。</p>
⑥発表の準備	<p>①発表の準備</p> <p>②発表の準備として自分の準備をする。</p> <p>③発表の準備として自分の準備をする。</p> <p>④発表の準備として自分の準備をする。</p> <p>⑤発表の準備として自分の準備をする。</p> <p>⑥発表の準備として自分の準備をする。</p>
⑦注意事項	<p>①発表が済んだら発表の準備はしない。</p> <p>②発表が済んだら発表の準備はしない。</p> <p>③発表が済んだら発表の準備はしない。</p> <p>④発表が済んだら発表の準備はしない。</p> <p>⑤発表が済んだら発表の準備はしない。</p> <p>⑥発表が済んだら発表の準備はしない。</p>

Reading Show とは、聞き手を意識して本文を読む活動である。Kellerman(1985)の U-shaped development で主張されているとおり、教科書本文の言語データ運用力を高めるためには、繰り返しその本文に触れることが必要である。自主学习で触れさせることはその1つの例であるが、そのきっかけの1つとして、学期に一度 reading show を行っている。これは、学習済みの単元の中から1ページを自由に選択させ、声の大きさ、速さ、イントネーション、音の明瞭さなどに注意して聴き手を意識し、productive に本文を読む活動である。一人あたりの制限時間は30秒

間。発表者のすぐ隣に2人ほど待機生徒として準備させておき、間をおかずに次々に自分が決めたページを読んでいく。評価の観点の第1は「look-up で読んでいるか」とし、聴き手を意識して本文を読むようにさせた。活動の様子はビデオに記録し、良かった生徒の発表は次の学年の生徒向けに残すようにしている。また、聴き手は各項目についてA B Cの3段階で発表者の評価を行った。

⑤活動を単発で終わらせないための工夫(Task Repetition)

Bygate (1996)は、同じタスクを繰り返すことによって、より適切な語彙選択につながると述べている。また、Bygate(2001)では、タスクの繰り返しによって、複雑で流暢な発話を引き出すという研究報告がされている。タスク活動においては、流暢さはもちろん、言語の複雑さを高める工夫をすることが大切である。

それだけでなく、繰り返しによって生徒のチャレンジ精神を刺激し、よい結果になることも多いのではないだろうか。

学期に一度きりのコミュニケーション活動では、どうしても単発的活動になりやすく、前回の活動で自己課題を発見しても、それを生かすことができないことが多々ある。コミュニケーション活動が効果を生むためには、生徒がその日の目標を達成できたかどうかを確認し、それに基づいて改善していくステップを、授業の中に入れる必要がある。かといって、時間のかかる活動を何時間も設定するのは無理がある。

そこで、三浦孝(2006)の研究を参考に、自作ポスターや picture book を用いた継続的プレゼンテーション活動を、単元のまとめとなる統合的学習活動として実践してきた。継続的プレゼンテーション活動とは、通常1回分のプレゼンテーションの内容を4回に分割し、5～10分の所要時間で継続して行う活動を表す。

これにより、生徒の改良の機会を増やすとともに、生徒にも教師にも活動の慣れを生み、短時間でも密度の濃い活動を行うことができた。

継続的活動の意義

- ア. 同じ活動を繰り返すので、活動の事前説明の時間が節約できる。
- イ. 同じ活動を繰り返す中で、生徒が次回の見通しを持って、工夫して臨むようになる。
- ウ. 同じ活動を繰り返す中で、教師がアクションリサーチ的に問題点を見だし、改良を加えられる。

参考文献：U-shaped behavioural development (Kellerman,1985)

Effects of task repetition (Bygate,1996)

Effects of task repetition on the structure and control of oral language (Bygate,2001)

平成18年度静岡大学教育学部研究報告・教科教育学編(三浦2006)

～ Show&Tell を分割して Task を繰り返す方法～

授業の最後に、生徒各自に四つ切り画用紙を配り、8ページの picture book の形にする。宿題として、Page1,2 に、絵を描くよう指示する。また、絵はできるだけ大きく描くよう指示する。

- 【第1回】 8ページの picture book のうち、第1回目は1, 2ページだけを発表する。
 - 【第2回】 1～4ページの内容を発表する。
 - 【第3回】 1～6ページの内容を発表する。
 - 【第4回】 1～8ページの内容（全部）を発表する。
- } 毎回必ず友達から feed back をもらう

原稿は作成しない！

picture bookで話の構成だけを確認しながら対話をすすめる



What does it mean?

It's the name of the professional soccer team.



**理解できないことをそのままにしない！
聞き手が理解できているか確認しながら対話をすすめる**



対話はボイスレコーダーに録音



5 まとめ

(1) スキルを高めるための活動を行って

T	In front of?
R	In front of.
S	Oh
R	You see?
S	I see.
R	Really?
S	Yes.
R	Do you understand?
S	Yes I do.

左は、対話後にボイスレコーダからおこしたカードで練習した表現を用いて、聞き手に理解が分かる。また、Active Listeningを実施したことにより、聞き手が質問できる回数が次第に増え、対話が活発になった。右の生徒は、開始当初2回しか質問できなかったが、7回目になると12回質問できた。3年生全体で質問回数が約450%伸びた。QAAQでは、1年生でも慣れると、3



分間で62文対話を継続するペアが出て
るなど、楽しみながら対話を継続してい
る姿が多く見られた。

← 3年生のQ A A Qの様子

1 年生の感想→

1 T	Do you play it every day?
2 speaker	Why don't you play it? How many times a day?
3 正	Why does he like it? Why does he play it?
4 ①	Why is he like that? Where is she?
5 IT	How old is she? Why does she play the
6 ②	Where did you Where is it? Why did he play Who is your teacher?
7 IET	What color is his dog? Who is his How big is his?

今日は、いい、いい英語を話
 こともできてよかった。次
 るときも、がんはリタイ。

今日は、会話をしました。やる
 かな話をしました。回数（は少し）
 たり。内容はヤルかたです。

- 国会議事堂を Japanese White House と言いかえをして
て良いと思った。

うまく言い換えたことがわかる振り返りシートの記述(3年生)である。Description の練習では、言い換えの練習だけでなく、分からない方が逆に質問することが有効である、と生徒の中で広がり、活発な練習となった。

(2)教科書指導について

リプロダクションまでもっていく教科書指導は、本文を理解し、内容を身につける上で有効であると約 90%の生徒が答えているとおり、様々な活動で本文を有効利用する姿が見られた(2010 年 12 月 3 年生)



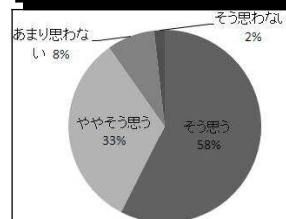
あかうなは部分は、一生懸命、言いつてて伝えたこと
できた。聞かずにして、もう少し、ありにで、質問でき
るという一と、感じました。でも、伝えることが、ス
ムーズに伝わった。おかげです。ありがとうございました。

ことができたからではないかと考える。

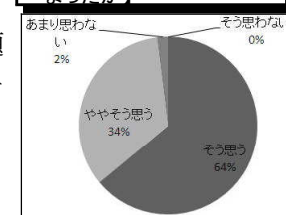
左の写真や右下の調査結果、及び下の生徒の感想からも分かる通り、ほとんどの生徒達は統合的学習活動における常設的学習活動に、楽しみながら参加することができた。それは、必要スキルを身につけた上で活動に取組み、課題を明確にしながら次への活動に生かしていくというサイクルを明確に位置づける

と考える。

Q:【Reproductionは、教科書の内容を身につけるために有効であった】



Q:【Show&Tellを4分割して積み上げることで、対話が深まったか】



(3) 今後の課題

来年度から新学習指導要領施行となり、教科書も新たなものとなる。帯活動で学習する表現については、これまでの教科書との比較を行う中で、各学年に最も適切な表現を再確認する必要がある。さらに、学習者コーパスの有効活用をしながら、各学年で押さえておくべき表現を整理していく必要があると感じた。

統合的学習活動では、コミュニケーションを通じて他者との相互理解を深めようとする意欲、態度面が大変重要である。そのため、仲間など人とのかわりを大切にし、自他の良さを互いに認め合える生徒を育成することが大前提となる。普段の授業から教師と生徒、生徒と生徒の間に良さを認め合いながら、今後も研究を深めていきたい。